

香港の年少者日本語学習に関する一考察

—保護者の意識を中心に—

木山登茂子・野村和之・望月貴子

〔要 旨〕

香港において、年少の日本語学習者が存在感を増しつつある。本論は、年少の日本語学習者に大きな影響を与えると思われる保護者を対象にインタビューを実施し、保護者が年少者に日本語を学習させる際の意識を考察する。全体的な傾向として、日本への親近感・好印象が、統合的動機へと結びつく。同時に、保護者の意識の中にある子どもの就職や旅行など具体的な目標が、道具的動機へと結びつく。加えて、統合的でも道具的でもない「学びそのものへの積極性」から生じる学習動機が存在する。香港においては、「学ぶこと」を肯定する意識が非常に強く、英語と中国語の習得が前提付けられた多言語社会にありながらも、日本語が第三の言語として学ばれるのである。

1. はじめに

国際交流基金による2009年海外日本語教育機関調査によれば、香港の成人の日本語学習者の総数はここ数年減少傾向にある。その一方で、数的には明示できないものの年少の日本語学習者の存在感が日増しに高まっており、香港日本語教育界の各方面からも「増えてきている」という実感が寄せられている。また、香港の学制改革の結果、日本の高等学校相当となる3年制の新後期中等教育（New Senior Secondary、以下NSS）で、2009年9月より正式な選択科目である「その他の言語（Other Languages）」の一つに日本語が導入されたことは大いに注目される。11年11月には、NSSの修了要件かつ大学入学資格となる香港中等教育証書（Hong Kong Diploma of Secondary Education、以下HKDSE）の試験が初めて実施される。同試験を実施する香港試験・評価局（Hong Kong Examination and Assessment Authority、以下HKEAA）の発表では、11年8月末時点で、11月に実施される日本語試験の応募者数は145名で、他言語の試験の応募者数に大差を付けている^①。

香港の日本語学習者の最新動向を捉えるべく、香港日本語教育研究会は「2010年香港日本語学習者背景調査」をウェブアンケート形式で行い、その結果を木山ほか（2011）としてまとめたが、存在感を増す年少学習者の意識や学習目的等を詳らかにするには至っていない。同調査では、20歳以上の学習者から948件の有効回答が寄せられた一方、20歳未満の学習者の回答は175件、10歳未満の回答は0件であり、成人に比べ20歳未満の回答が著しく少なかったのでは

る。しかし、木山ほか (2011) が指摘するように、年少学習者から回答を得るためには、ウェブアンケート形式では限界があった。またインターネットを使用せずに、年少学習者を対象とした大規模な量的調査 (質問紙調査) を別途実施することも現実的ではなかった。年少学習者と一概に言っても、未就学児から中高生まで幅広く、成人と同一の手法を用いることは不可能なためである。そこで本稿では、年少日本語学習者を調査する第一歩として、年少者の学習に多大な影響を及ぼすと思われる保護者を対象とした小規模な質的調査を実施し、保護者の意識が年少者の日本語学習に与える影響を明らかにする。

2. 背景と先行研究：香港の言語教育政策と日本語学習

年少者の言語学習にはその地域の言語教育政策が大きく影響する。香港では中国返還後の1998年から、「二文三語政策」(bilingual and trilingual policy) が採用されている。これは二つの書記言語 (英語と中国語)、三つの口頭言語 (英語と広東語と北京語^②) の能力を高めるための教育政策である。香港では一部の国際学校などを除き、初等・中等教育段階を通して、二文三語の学習が前提付けられている。人口の圧倒的多数を占める広東語母語話者は、幼いころから国際語としての英語と、教育政策においては「母語」とされる (広東語とは距離のある北京語に基づいた) 中国語の書記言語の双方のリテラシーを身につけることが求められている。返還後、英語は宗主国言語としての地位を失ったものの、依然として就職や進学の際に、そのスキルが前提とされる。また返還後に重要性を増した北京語と比しても、英語はビジネスや日常の社交において依然重要である。二文三語政策の背景については、上田 (1998)、その後の経緯については宮副ウォン (2002)、宮副ウォンほか (2003、2004)、金丸 (2005)、Lin & Man (2009) 等に詳しい。

二文三語政策の影響下にある香港の年少者が日本語を学習するとき、多くの場合、日本語が母語である中国語、第二言語である英語に次ぐ第三の言語になると同時に、2009年9月まで日本語が公的な認知を受けず、試験制度の枠外にあったという条件を十分考慮しなければならない。

このような条件にありながら、国際交流基金海外日本語教育機関調査の結果によれば、香港では1993年に16,704名であった総日本語学習者数は、2006年まで飛躍的な増加が見られ (32,959名)、最新の2009年調査では28,224名と減少傾向が見られるものの、公的認知を受けない言語の中で群を抜いて学習者の多い言語として特別な地位を維持している。

香港日本語教育研究会で実施した「2010年香港日本語学習者背景調査」によると、日本の大衆文化 (映画、テレビ、アニメ、ファッション、ゲーム) と食文化の浸透、日本への旅行などが香港人学習者にとって身近な体験になっていることが数値としても認められ、日本の物が身近なものとして意識されていることがわかる (木山ほか2011)。

近年の学習動機に関する研究では、香港の大学生日本語学習者の「情意的 (affective) な動機と実用的 (pragmatic) な動機を矛盾なく持ち合わせている」(Humphreys et al. 2007) という特徴や、社会人学習者の動機の変化 (ギブソン2009、瀬尾2011a、2011b) が指摘されている。

年少の日本語学習者の意識については、宮副ウォンらの調査により、中学生が「日本の文化・社会を理解したい (字幕なしで日本のドラマがわかるようになりたい)」「日本人と双方向的な異文化交流がしたい」「日本人と日本語でコミュニケーション実質行動をしたい」という希望や、日本についての最新情報に高い関心を持ち、日本語が中国語、英語よりも中学生にとって関心のある言語であり、日本のものを理解するために役に立つ言語だと意識されていることが明らかになった (宮副ウォンほか2004、Leung et al. 2004)。この傾向は、リブネ宮崎 (2006) の調査結果とも一致している。

また、課外活動を含む日本語の授業を実施している中学校へのアンケート調査 (村上・松本2009) によると、中学校に日本語を取り入れている主な理由は「生徒の国際理解促進」「生徒・親からの要望」「通識 (一般教養) の一環」が挙げられている。ここに生徒の保護者の影響が認められる。

中等教育機関における日本語教育の展開を探求するため、調査対象に保護者を含めたものとしては、リブネ宮崎 (2009) がある。必修科目として日本語を取り入れている中学校の生徒の保護者に対するアンケートで、「必修でなくても日本語を習わせたい」保護者が半数を超え、その理由の上位に「いろいろな言語を学ぶのは良いことだから」「多種多様なことを学ぶのはいいことだから」「将来の仕事に役立つから」「スキルアップすることで自己を高められるから」「実用的で役に立つから」「異文化を知り、見識が広がるから」「子どもが興味をもっているから」があげられ、香港の保護者の意識の一端をうかがい知ることができる。

以上の背景と先行研究を踏まえ、本稿では、年少の学習者が新しい言語の学習を始める際に、保護者の意識が大きな影響を与えるとの見地から、3歳から18歳までの学習者の保護者に、インタビュー形式を用いた質的調査を行い、年少の学習者の保護者の意識を詳らかにしたい。

3. 仮説の設定：香港における「学び」への姿勢

質的調査を実施するための仮説を設定すべく、香港で、「学び」がどのように捉えられているのかを考察する。

香港では、未就学児から成人に至る全年齢層で、いわゆる「習い事」と呼ばれる生涯・課外学習が好まれ、生涯・課外学習機関が一大産業を形成している。日本と異なるのは、各大学に生涯・課外学習機関が付属している点である。大学付属の生涯・課外学習機関のうち、最大規模を誇る香港大学専修進修学院 (HKU SPACE) で学ぶ学生は、2009年から10年度で約95,000名⁽³⁾、それに次ぐ規模と目される香港中文大学専修進修学院 (CUSCS) は約39,000名と⁽⁴⁾、規

模が大きい。成人の場合は、政府が「持続進修基金」(Continuing Education Fund、以下 CEF)を通して生涯学習のための補助金を提供していることも、要因の一つに挙げられる⁽⁵⁾。

学びが日常生活と深く結びついた香港では、成人の生涯学習に加え、保護者が子どもに多くの課外学習をさせることが一般的である。日本では、ベネッセ教育研究開発センター(2008)によると、子どもに課外学習をさせている保護者の割合は約53%で、その数は大多数が一つか二つである。一方、香港の子どもには成人の CEF に相当する補助金がないにもかかわらず、88%以上の保護者が子どもに課外学習をさせているという MasterCard Worldwide の調査が報道された⁽⁶⁾。極端な例では、5歳の娘のために、10以上の課外学習に月に60,000円から80,000円という(香港の物価水準において)かなりの高額を費やす親が話題となった⁽⁷⁾。また、香港では「名門」学校に入学させるべく、保護者が課外学習の証書を多く呈示して、学校側に我が子をアピールすることが、もはや「常識」と化している。いずれも、課外学習が自己目的化している状況を覗かせる。

このような香港の学びを取り巻く状況から、第二言語の英語に加え、課外学習の一環として、第三の言語として日本語を子どもに学習させる保護者が多い。それでは、保護者は何に動機づけられて日本語を子どもに学ばせるのであろうか。ある言語を学ぶ動機づけは、Gardner & Lambert (1972) の古典的研究以来、実利的な目的に役立てたいという道具的動機 (instrumental motivation) と、その言語が話される社会・文化へ自己を一体化する統合的動機 (integrative motivation) の二分法で語られることが多かった。一方で、Deci & Ryan (2002) 等の、学習者の外部からの影響など外発的要因による外発的動機 (extrinsic motivation) と、言語そのものへの興味や学習の達成感・充実感など学習者の内発的要因による内発的動機 (intrinsic motivation) から捉える立場もある。外発的動機と内発的動機は学習者の心理において連続したものと捉えられ、前者を後者へと転換する重要性が指摘されている (李2003ほか)。

木山ほか (2011) によれば、「2010年香港日本語学習者背景調査」において、「はい」の回答が9割を超えた学習目的は、「日本語でコミュニケーションができるようになりたい (97.95%)、日本語自身に興味がある (96.62%)、日本が好きだから (93.68%)、日本へ旅行に行くため (91.18%)」の4項目である。第一の「日本語でコミュニケーションができるようになりたい」、第二の「日本語自身に興味がある」は共に内発的動機の好例と言えよう。第三の「日本が好きだから」は統合的動機の一つであり、かつ内発的動機とも解釈できる。第四の「日本へ旅行に行くため」は、余暇とはいえ実利的な目的があり、本稿では道具的動機と捉える。これらに加えて、年少者の場合は、保護者からの圧力やインセンティブによる外発的動機で、日本語を学び始めるケースも想定できる。

しかし、「2010年香港日本語学習者背景調査」の回答等を検討した段階で、道具的か統合的かの二分法にも、外発的か内発的かという学習者の心理的側面からも捉え切れない、年少者の

日本語学習を動機付ける新たな要素が浮上した。そこには日本語が「課外学習の一環であること」が強く関係している。つまり、「多くの言語を学ぶことは良いことである」、更には「何かにつけ幅広く学ぶことは良いことである」等の、学びそのものを積極的に肯定する意識の存在である。ここには、前述したように、学びが自己目的化している状況が介在すると推察できる。これを踏まえ、「保護者が子どもに日本語を学ばせるのは、学びそのものへの積極性が関係している」との仮説を設定し、質的調査を実施した。

4. 調査方法

質的調査は、2011年7月から9月にかけて実施され、インタビュアーと調査協力者(保護者)が個別に対面するインタビューの形をとった。調査対象は未就学児からNSS修了(大学入学前)までの日本語学習者の保護者であり、インタビュー及びその結果の公表に同意した保護者は9名(夫婦一組を含む)であった。インタビュアーは香港在住の日本人で、使用言語は調査協力者に合わせて広東語、英語または北京語とした⁽⁸⁾。保護者に加えて、子ども本人の意識も重要であるため、可能な場合は子どもにも同席を求め質問した⁽⁹⁾。保護者とその子どもの属性を下記の表に記す。「家族関係」欄の「※」は、インタビューに同席した子どもを表している。

表 保護者とその子どもの属性

	家族関係	年齢・学年	所属学校	日本語学習歴	日本語学習機関
A	母 長男※ 次男※	非公表 15歳中5 12歳中1	該当せず 現地校 現地校	該当せず 3年/N4取得、N3受験済 3年/N4受験済	該当せず 地元日本語学校 地元日本語学校
B	母 娘※	48歳 16歳中4	該当せず 現地校	該当せず 3年/中級レベル	該当せず 日系日本語学校
C	母 息子	非公表 11歳小6	該当せず 現地校	該当せず 3年/子どもの初中級レベル	該当せず 地元日本語学校
D	母 息子	非公表 9歳小3	該当せず 国際校	1年 4年/初級レベル	地元日本語学校 地元日本語学校
E	父 母 息子	45歳 38歳 3歳幼稚園	該当せず 該当せず 現地園	不明 2年 1年/プレイグループ	自主学习 地元日本語学校 地元日本語学校
F	母 娘※	53歳 18歳中6	該当せず 現地校	1か月 2年	地元日本語学校 中学校
G	母 息子	非公表 小6	該当せず 現地校	該当せず 2年	該当せず 地元日本語学校
H	父 息子	39歳 4歳	該当せず 現地園	年数不明 4年(母日本人)	自主学习、家庭 地元日本語学校、家庭

調査形式は、事前に質問項目を設定し、それを元にインタビューを進行しながら、自然な流れの中で自由な質問を許容する半構造化インタビューを採用した⁽¹⁰⁾。質問項目は「属性」、「学習動機」、「文化等への関心・興味」、「費用・時間」、「自主学習経験」、「保護者の学習経験」、「日本語能力試験 (以下 JLPT)」、「NSS カリキュラム」、「震災・円高の影響」、「家庭の状況」、「目標」の計11群から構成される。質問の順序は、インタビュアーの判断で調整される。「属性」は年齢や家族構成、日本語学習歴などの基本事項を確認するための群である。「学習動機」は本稿の仮説を検証する上で核となる項目であり、これを「属性」を除いた第一の群とした。「文化等への関心・興味」は、「2010年香港日本語学習者背景調査」にも含まれる群で、本調査では主に保護者の日本文化への態度や日本との繋がりと子どもの日本語学習との関連を見る群である。「費用・時間」は課外学習の一つである日本語に、どれほどの費用と時間を投資できるかを見る群である。「自主学習経験」は、子どもが学校や課外学習機関等で日本語を学び始める前に、日本語を勉強した経験があるかを見る群である。「保護者の学習経験」は、保護者の日本語学習経験と子どもの日本語学習との関連を見る群である。「JLPT」、「NSS カリキュラム」は共に、試験・資格への態度を見る群である。「震災・円高の影響」は、東日本大震災と原発事故、そして最近の円高傾向が日本語学習へ影響を与えているかを見る群である。「家庭の状況」は、家庭内の言語使用状況やインタビューを受けていない保護者(母の場合は父)の意識を見る群である。「目標」は親が期待する学習到達度を見る群である。質問項目の一覧は稿末の添付資料を参照されたい。

5. 調査結果

本章では、まず調査結果の全体的な傾向として、日本への親近感や好印象が統合的動機へと繋がる点を概観する。次に、特に保護者の意識をまとめ、就職や旅行などを視野に入れた道具的動機が強くある点、JLPT等の資格への志向が極めて顕著な点、親の日本語との関わりの有無で子に期待する到達度が異なる点などを述べる。最後に、回答の中に見られた、統合的動機とも道具的動機とも解釈しがたい、「学びへの積極性」から生じる動機の内容を指摘する。全インタビューの結果を詳細に掲載することは紙幅の都合上叶わないため、各年齢層を代表する5家族を選択した上で、回答の一部を要約し、稿末の添付資料にまとめる。割愛分を含む詳細は稿を改め発表したい。

5.1 日本への親近感・好印象と統合的動機

日本文化への関心や日本に関わる体験を通して、日本への親近感や好印象が生じ、これが学習動機となる傾向が見られる。これらは統合的動機の範疇にあると見なせよう。これは「2010年香港日本語学習者背景調査」において指摘された傾向とほぼ同様である(木山ほか2011)。

第一に、日本のアニメや漫画、ゲーム等への興味が、日本（語）への親近感に繋がるという回答が多く見られた。幼少時から、日本のアニメやゲームなどの日本製品に囲まれて育っていることや、回答者全員が「自宅にDSやプレイステーション等の日本製ゲーム機がある」と回答している点からも視える。更に日本製品への親近感から、「日本語は自分にとって身近な存在という意識で好印象を抱いている」（A長男・次男、D母親）という回答も見られた。また、「日本の芸能人のファンで、芸能人の言っている事が知りたい、より近づきたいという気持ちから学習を開始した」（B娘）という回答は、統合的動機の好例と言えよう。

第二に、日本食が香港において日常生活の一部となっていることが視られる。これは、「2010年香港日本語学習者背景調査」とも共通する結果である。特に、日本料理に関しては、「週に1、2回日本料理を食べる」（C母、D母）、「よく食べる」（A母、B母、E父・母）、「日本料理が好き」（A長男・次男、B娘）など、日常生活の一部となっていることが視られる。中には「自分でも作る」（B母）という、スーパー等で日本の食材を入手しやすい香港ならではの回答もあった。

第三に、日本への印象についての質問に対しては、好印象を持つとの回答が目立った。その中で、「食べ物のおいしさ」（B母）や「町並み・自然の美しさ」（A母・長男、B母、C母）などの物質的な要素に加え、「日本人の礼儀正しさ」（A母、B娘、C母、D娘）や、「親切さ・思いやりの心」（A母、B娘、C母、D母、E父）など、日本人の精神性に関わる要素を挙げた回答も多かった⁽⁴⁾。

第四に、日本旅行については経験があるとの回答がほとんどであり、「旅行先に日本を選ぶ。何度も日本へ行く」（A母・長男、D母、E父・母）という積極的な回答も目についた。最近では、東日本大震災や、急激な円高の影響から、日本へ旅行しにくい状態が続き、日本語学習にも負の影響がありうると予測をしていた。しかし、実際の回答からは、円高のため旅行を控えるなどの傾向は見られるものの、学習の停止といった行動には結びつかない旨の意見が目立った（A母、C母、D母）。更に震災による影響も、それが直ちに日本語の学習意欲に影響することはなく、「かえて日本の現状に関心を持つようになってきた」（B母）という変化もあった。

また印象的であったのが、震災や円高が日本語学習に及ぼす影響については、全員が「特になし」と回答した点である。「2010年香港日本語学習者背景調査」では、全体の91.18%が「日本へ旅行に行くため」と回答している（木山ほか2011）。このため、震災や円高という日本旅行がしにくい状況下では日本語学習を停止・中断することが予想された。しかし実際は、震災や円高が日本語学習に及ぼす影響については、全員が「特になし」と回答した。

5.2 保護者の意識：道具的動機・資格志向・期待する到達度

第一に、日本語を学習させる理由としては、「日本語の使用場面の多さ」(B母、C母)と共に、日本語の実用性、すなわち「将来の仕事に役立つ・旅行で役立つなどへの期待」(B母、C母)を挙げる保護者が目立った。仕事への有用性は、典型的な道具的動機と言える。また、多くの場合日本旅行は余暇目的であるが、「余暇のための道具」もありうると解釈すれば、旅行への有用性も道具的動機である。

第二に、JLPTやHKDSE等の資格を重視する回答も非常に顕著であった。JLPTについては、大学入学試験の準備で忙しくなる中学4年生の保護者が「まずは(日本語以外の)学業を優先する」(B母)と回答したのを除いた全員が、「JLPTを受けた事がある」(A長男・次男)、「これから受ける予定だ」(A母、C母、E母)と回答した。現時点での受験を希望していない保護者も、「将来は受けさせるつもりだ」(B母)と回答した。また到達級については、全員が最高レベル(N1)の取得を希望すると答えた。JLPTの級という目に見える資格で、日本語能力を証明したいという志向が強いといえる⁽¹²⁾。一方、HKDSEについては、「選択肢が広がり、公的な資格も取れるので履修・受験を希望する」(C母)のような積極的な回答の反面、「学校が情報をきちんと与えてくれるなら」(B母)、「子どもの学習の様子を見て」(D母)など、科目が導入されて間もないがゆえに慎重な意見も目立った。

第三に、到達レベルについては、親の日本語との関わりの有無で差異が見られる。日本語を学んだ事がなく、日常的に日本語を耳にする機会の少ない保護者(A母、B母、C母)は、子どもに期待する日本語の到達度を「雑誌やテレビがわかるレベル」(A母)、「日本研究の専門家など」(B母)、「旅行や通訳・日本語教師などの仕事の間」(C母)と具体的にイメージしている。対照的に、学生時代に1年間勉強した経験があり、日本人に嫁いだ親友のいる保護者は「子どもの希望次第」(D母)、日本語を学んだことがあり、日本企業に勤務し日本語との接触の多い保護者も「特にない。楽しく勉強できればいい」(E母)と回答しているのは非常に興味深い。

5.3 「学びへの積極性」から生じる動機

学習動機に関し、「自宅近辺に日本語学校があり、通いやすかったから」(A母)、「夏休みに何か勉強させたいと思っていたときに、日本語のコースがあることを知った」(A母、B母)という保護者からの回答が見られた。これらは明らかに統合的動機ではなく、具体的な目標(仕事や旅行など)のための学習という道具的動機の範疇にも当てはまらない。また、保護者は学習の主体ではないため、外発的・内発的動機の枠組によって捉えることも適切ではない。「もともと日本語の学習には意欲的ではなかったがやっているうちに興味が出てきた」(A長男)、「日本語はおもしろい」(B次男)等、学習の主体である年少者が内発的に動機付けられてい

る例とも異質である。

むしろ、これらの保護者を動機付けている要因こそ、「何かにつけ学ぶことが重要であり有益である」という、仮説において想定した「学びそのものへの積極性」から生じた動機なのではないだろうか。「今は別に何か目的があって学ばせているわけでないから。何かを学ぶのはごく普通のことだから」(E父・母)という回答した保護者の意識には、「学びへの積極性」がとりわけ純粋な形で現れているように思われる。

他に、日本語が「フランス語やスペイン語、韓国語など他の言語よりも学びやすい」(A長男、C母、E父)という回答もあった。これは些か消極的ではあるが、何かを学ぶ意欲があり、何を学ぶべきかとの選択を経て、あまり労力を必要としなさそうな日本語へと行き着いた意識が反映されている。これも、「何かを学びたいと思い、その中で学びやすそうなのが日本語であった」という「学びへの積極性」に繋がる動機と言えよう⁽¹³⁾。

以上の回答から、「学びへの積極性」に動機づけられた保護者が、子どもの課外学習として日本語を選択する、というプロセスが浮かび上がった。選択するプロセスにおいては、統合的・道具的動機等も重要な要因である。しかし、木山ほか(2011)を含め、従来の研究では、統合的動機に繋がる日本への親近感・好印象や、道具的動機につながる日本旅行などが着目される反面、香港人の学びを強く肯定する意識へ目が向きにくい傾向があった。本稿は、統合的・道具的、あるいは内発的・外発的などの動機付けの枠組を越えて、「学びへの積極性」を手がかりに、年少者の日本語学習と、そこに介在する保護者の意識を捉える重要性を指摘したい。

6. 結論と課題

これまで、香港における年少の日本語学習者に大きな影響を与えると思われる保護者を対象に実施したインタビュー調査の結果から、保護者の意識を探り、年少者の日本語学習に対する動機付けの分析を試みてきた。全体的な傾向として、日本への親近感や好印象が、日本語学習への統合的動機を生じさせる点が明らかになった。同時に、保護者の意識の中で、就職や旅行など具体的な目標が、日本語学習への道具的動機に結びつく点も指摘した。加えて、統合的動機とも道具的動機とも異なる、「学びへの積極性」から生じる動機も浮かび上がった。第4章で、調査のための仮説として、「保護者が子どもに日本語を学ばせるのは、学びそのものへの積極性が関係している」と想定した。「学びへの積極性」で、年少者の日本語学習が全て説明できるわけではないが、動機を決定づける要素の一つを担っているか否かに限定すれば、仮説は肯定されたと考えて良い。前述の通り、多言語社会である香港では、二文三語政策により、母語である中国語に加えて、英語の習得が前提付けられている。年少者が、幼い頃から多言語を学ぶのは決して容易なことではなく、学習過程でドロップアウトしてしまう者も少なからず存在する(Lin and Man 2009: 46-48)。一方で、香港においては、学びを肯定する意識が非常

に強いがゆえに、母語と第二言語の学習に加えて、日本語を第三の言語として学ぶことを選択する層が存在する。無論、「学びへの積極性」という概念をより精緻化するためには、引き続き、保護者とその子どもの意識を深く掘り下げ、同時に関連研究を調査することが欠かせない。これについては、稿を改めて論じることとしたい。

しかしながら、これまで明らかにした点は、香港における年少の日本語学習者の動向を捉えるための一端に過ぎず、課題が残されている。第一に、変化の著しい香港の言語教育政策とその影響の検証である。特に年少者の場合は、教育カリキュラムによって、学習動向が大きく左右される。香港は学制改革の途上にあり、NSS や HKDSE の今後の動向を注意深く観察する必要がある。また、言語政策の策定段階において、日本語教員の意見が幅広く反映されるよう働きかけることも重要である。第二に、研究者の側が年少者の日本語教育に更に目を向けることである。中学校においては、(執筆時の2011年9月時点で)初回のHKDSE日本語試験を2011年11月に控えているにもかかわらず、試験内容が把握しきれず、教育現場で戸惑いが広がっている。まず、試験内容とその背景を十分に理解した研究者が、日本語担当教員と協力しながら混乱を解消する取り組みが急がれよう。一部の小学校や未就学児教育機関(幼稚園やプレイグループ等)でも、日本語教育が行われているが、現状把握ができておらず、支援策もほとんど講じられていない。今後は、英語教育や北京語教育での蓄積を活用し、日本語の専門家がこれらの言語の専門家と連携することで、具体的な支援の取り組みへと繋げることが望まれる。香港における年少者の日本語教育研究は、未だ萌芽期にある。今後、この研究の輪が更に広がり、日本語教育の現場へ還元されることを期待したい。

〔注〕

- ⁽¹⁾ 他言語の応募者数はフランス語、ヒンディ語、ウルドゥ語が各10名、ドイツ語が3名、スペイン語が0名。但しHKEAAによれば、フランス語は12年5月にも試験が実施されるため、フランス語の最終的な受験者は100名前後の見込み。
- ⁽²⁾ 厳密には、「北京語」とは北京土着の方言を指すが、本稿では日本語の慣用に従い、北京方言を基礎に発達した中国語圏において「普通話/國語/華語」と呼ばれる共通語を「北京語」と呼称する。
- ⁽³⁾ HKU SPACE「資料概況」<<http://hkuspace.hku.hk/cht/about-us/facts-figures>>。2011年9月27日参照
- ⁽⁴⁾ CUSCS「学院簡介」<<http://www.scs.cuhk.edu.hk/cuscs/tc/about-intro.php>>。2011年9月27日参照
- ⁽⁵⁾ CEFとは、香港政府が18歳から65歳までの成人を対象に、外国語などの分野で認定された生涯学習・職業訓練課程を受講した場合に、一人当たり10,000ドルを上限として学費の80%を給付する制度。
- ⁽⁶⁾ 『明報』<<http://news.mingpao.com/20110927/gfb1.htm>>。2011年9月27日参照
- ⁽⁷⁾ 香港雅虎『経済日報』<<http://hk.news.yahoo.com/5歳童報10興趣班一月花8千-225043048.html>>。2011年9月27日参照。1香港ドル=約10円として換算。
- ⁽⁸⁾ 言語間のコード切り替え等で、一つのインタビューに複数の言語が用いられた場合がある。
- ⁽⁹⁾ 子どもが小学校低学年以下等で保護者と同じ質問では理解しにくい場合、あるいは、「恥ずかしい」「気が進まない」などの理由からためらった場合には、同席を求めなかった。

香港の年少者日本語学習に関する一考察

- ⁽¹⁰⁾ このため、各インタビューの所要時間は20分から1時間程度と幅があった。
- ⁽¹¹⁾ これには、大震災発生時の日本人の秩序ある行動に対する好意的な報道が影響しているのかもしれない。
- ⁽¹²⁾ 近年の香港地区 JLPT 受験者数は、16,974名 (08年)、20,175名 (09年)、14,264名 (10年) (阮2011)。
- ⁽¹³⁾ また前述の資格志向も、就職や進学のためという明確な目標があれば道具的動機であるが、「学びへの積極性」から、自らの到達度を確認すべく受験したいという動機も想定できよう。この点については、更に論が待たれる。

〔参考文献〕

- 上田和子 (1997) 「香港の言語政策」『日本学刊』創刊号、62-71
- 金丸芙美 (2005) 「返還後の香港における言語の行方—『両文三語』政策をめぐる—」『東京理科大学紀要、教養篇』38号、153-169
- ギブソン 壽美子 (2009) 「香港における社会人の日本語学習動機の一研究—動機の変化を中心に—」『第8回国際日本語教育・日本研究シンポジウム会議録 アジア・オセアニア地域における多文化共生社会と日本語・日本研究』182-188、向日葵出版社
- 木山登茂子、中野貴子、周宏陽、上田早苗、望月貴子、蘇凱達、青山玲二郎 (2011) 「2010年香港日本語学習者背景調査報告」『日本学刊』14号、176-195
- 阮亦光 (2011) 「2010年度香港・マカオ日本語能力試験実施報告」『日本学刊』第14号、196-209
- 瀬尾匡輝 (2011a) 「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化—修正グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から探る—」『日本学刊』第14号、16-39
- (2011b) 「香港の上級の日本語生涯学習者の動機づけ—学習者の日本語歴史から動機づけを探る—」『アジア日本研究』第1号、11-25
- ベネッセ教育研究開発センター (2008) 『第3回子育て生活基本調査報告』ベネッセコーポレーション
- 宮副ウォン裕子 (2002) 「<多言語社会>に未来はあるか？」『香港日本文化協会創立40周年特刊』80-89
- 宮副ウォン裕子、鈴木東、石秋炯 (2003) 「社会言語学的観点から香港における外国語としての日本語の地位を考える」『アジア太平洋地域における日本語教育と日本研究—現状と展望』344-347
- 宮副ウォン裕子、マギー・梁安玉、李維儉 (2004) 「香港の中等教育における最近の動向」『専門日本語研究』第6号、61-65
- 村上仁・松本真澄 (2009) 「香港における中等日本語教育の現状—アンケート調査報告—」『第8回国際日本語教育・日本研究シンポジウム会議録 アジア・オセアニア地域における多文化共生社会と日本語・日本研究』182-188、向日葵出版社
- 李受香 (2003) 「第二言語および外国語としての日本語学習者における動機付けの比較—韓国人日本語学習者を対象として—」『世界の日本語教育』第13号、75-92
- リブネ宮崎紀子 (2006) 「香港の中等教育機関における日本語学習についての一考察—中学生日本語学習者は何をもちめているか」『日本学刊』第10号、155-168
- (2009) 「香港の中等教育機関における必修科目としての日本語教育の展開—学校、生徒、保護者側それぞれの視点から—」『2009年度第8回日本語教育学会研究集会東北地区』資料、日本語教育学会、23-30
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (2002). *Handbook of Self-Determination Research*. Rochester, NY : University of Rochester Press.
- Gardner, R.C. & Lambert, W.E.(1972). *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, MA : Newbury House.

- Humphreys, G. & Miyazoe-Wong, Y. (2007). "So What in the appeal?" The Phenomenon of Japanese as A Foreign Language in Hong Kong, *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, Vol.28, 468-483.
- Leung, O.Y., Miyazoe-Wong, Y. & Lee, W.K. (2004). Hong Kong's secondary school pupils' attitudes toward Learning Japanese Language as a regular school subject - a pilot study, *Nihon Gakkan*, Vol.8, 141-148.
- Lin, A.M.Y & Man, E.Y.F. (2009). *Bilingual Education : Southeast Asian Perspectives*. Hong Kong : Hong Kong University Press.

〔添付資料〕 インタビューの質問項目と回答 (要約)

0. 属性

	回答者	日本語学習機関	日本語学習期間と調査時現在の到達度
A	長男	地元日本語学校	3年/N4取得、N3受験済。
	次男	地元日本語学校	3年/N4受験済。
B	娘	日系日本語学校	3年/中級5クラス。
C	母	地元日本語学校	3年/子どもの初中級(レベル7)。
D	母	地元日本語学校	4年/初級レベル。
E	母	地元日本語学校	1年/プレイグループ。

1. 学習動機

1-1. 日本語を学んでいる・学ばせている動機		
A	母	夏休みに何か習わせたいと思っていたら近所にちょうど日本語のサマーコースがあったので。
	長男	本当は日本語を学びたかったわけではなかったが、やっているうちに興味が出てきた。旅行にも便利だと思う。
	次男	日本語は面白いから。
B	母	中1の夏休みは時間があつたから日本語を勉強させてもいいかなと思った。
	娘	嵐が好きで、彼らが言っている事がわかるようになりたかったから。
C	母	中国語・英語以外の言語を学ばせたかった。HKDSEの選択科目である事も関係あるが、子どもがアニメ・玩具などを通して日本に興味を持っていたこと、また他言語に比べて実際に使用する可能性が高いことが一番の理由。
D	母	日本を旅行することが多いから。親は5~6回、子どもは3年前に1回行った事がある。
E	父母	親子で共通の話題ができるから。夏休みに幼児向けの日本語プレイグループがあることを知り、通わせるようになった。
1-2. 他言語でなく日本語を選んだ理由		
A	母	日本語は学校も多く選択肢も多い。他言語の学校は近くであり見かけないし、遠くの学校に通わせたくない。
	長男	近所に学校があつて便利だったから。週1回学校でスペイン語を習っているがなかなか身につかない。日本語は漢字があつてフランス語やドイツ語より親しみやすい
	次男	フランス人やドイツ人は英語でコミュニケーションできるが、日本人とは英語でのコミュニケーションが難しいから。
B	母	日本語を勉強すれば歌やテレビ番組がわかるようになる。日本語は接する機会が多いから勉強しやすい(漫画・アニメ等)。自分自身も日本を旅行するのが好きだから。
	娘	他の言語にはあまり興味を持てなかった。
C	母	日本語は香港でも使い道があるが、フランス語などは留学に行くわけでないなら、使い道はなく結局忘れて無駄になる。
D	母	日本に対して特に良い印象を持っている。
E	父母	父親はドイツ語、韓国語を学んだ事があり、将来は子どもにも学ばせたいと思っているが、今はまだ子どもが小さいため混乱を防ぐためにも両親共に話せる日本語を選んだ。

香港の年少者日本語学習に関する一考察

2. 文化等への関心・経験

2-1. 日本旅行についての関心・経験		
A	母	覚えていないぐらい何回も家族で旅行している。
	長男	5～6回日本に行ったことがある。
B	母	旅行自体が好きで若いころ日本でバックパック旅行をしたことがある。
	娘	幼少時に一度、昨年はコンサートに行くためとスピーチコンテスト入賞の副賞で2回日本へ行った。
C	母	15年前（出産前）に1回行った事がある。子どもに日本語が上手になったら日本に連れて行くからガイドになってと言っている。
D	母	旅行先に日本を選択する事が多く、これまでに東京・大阪・北海道へ行ったことがある。
E	父	旅行で日本に行ったときに親が日本人と日本語で話している姿を見せて子どものモチベーションを高めたい。
	母	子どもが生まれる前は年に2～3回日本に行っていた。子どもの日本語が上手になったら日本に連れて行きたい。
2-2. 日本食についての関心・経験		
A	母・子	日本食が好きでよく外で寿司などの日本食を食べる。
B	母	日本食が好きでここに来る前もトンカツを食べてきたばかり。家でもよく寿司を作る。日本に友人がいるので味噌汁などの作り方も習ったことがある。日本食は食材も入手しやすい。
	娘	食べるのは好きだが自分で作ったことはない。
C	母	ある、毎週1～2回は食べる。子どもも寿司やラーメンが大好き。
D	母	週に1回は日本食を食べる。親は寿司、子どもはうどんが好き。
E	父母	好き。寿司やラーメン等をよく食べる。
2-3. 日本のゲームについての関心・経験		
A	母	兄弟で1台ずつプレイステーションを持っている。
B	娘	兄妹で1台ずつDSを持っている。
C	母	子どもはwiiやDS、プレイステーションのほか、携帯電話のアプリでも遊んでいる。
D	母	家にDSやプレイステーションがあり、日本語のゲームもある。
E	父母	DSやプレイステーションで遊ぶが子どもの前ではやらない。視力が落ちるので子どもにはゲームをさせていない。
2-4. 日本のアニメについての関心・経験		
A	子	吹き替え版（広東語）の日本のアニメをよく見る。
B	母	子どもが小さいころキャプテン翼、聖闘士星矢などを一緒に見ていた。
	娘	小学生のときはよく見ていた。
C	母	夏休みなどはよく見ているが、普段はピアノやバイオリン、楽団のレッスンで忙しいためテレビ自体を見る時間がない。
D	母	よく見ている。親も子どものころ宮崎駿の作品をよく見ていた。子どもはドクターランプが好き。
E	父母	ドラえもん、ドラゴンボール、アラレちゃんなどが好きでよく見ていた。子どもにはあまり見せていない。
2-5. 日本の漫画についての関心・経験		
A	長男	中国語に翻訳されたものを読んだことがある。
B	娘	今でも日本語版の漫画を時々読む。
C	母	親が与えていないためあまり読んだ事がない。
D	母	中国語版ドラえもんなどを親子共に読んだことがある。
E	父	子どもに漫画は読ませていない。
	母	漫画はドラえもん以外あまり読んだことがない。
2-6. 日本の音楽についての関心・経験		
A	長男	浜崎あゆみのファン。
B	母	音楽が好きで若いころ山口百恵や五輪真弓などの歌を聞いていた。
	娘	嵐の大ファン。
C	母	子どもは自分でインターネットを検索して視聴している。
D	母	特に興味なし。
E	父	ZARD、TRFなどが好きでよく聞いている。
	母	特に興味なし。子どもには日本語のクラスで聞く童謡などを家でも聴かせている。

2-7. 日本の伝統文化についての関心・経験	
A 母	温泉、着物に興味がある。
長男	日本式の建築、寺院、和室に興味がある。
次男	着物に興味がある。
B 母	寺院が好きで浅草寺でお守りを買った事がある。20数年前に民宿に泊まったときに茶道を体験した。
娘	お寺でおみくじを引いたりお守りを買ったりするのが好き。茶道のマナーを学んだ事があるがそれほど大きな興味はない。
C 母	テレビやドラマを通して着物等を見たことがある程度。
D 母	着物を見たことがある。
E 父	自宅でNHKが視聴可能なので、よくテレビの番組で伝統文化を紹介する番組を見ている。
母	特に強い興味はないが、観光でお寺やお祭りの様子を見るのは好き。
2-8. 日本の経済・ビジネスについての関心・経験	
A 全員	特に興味なし。
B 母	昔学校で経済を教えていたので日本経済の繁栄・衰退に大いに興味がある。
娘	円高なので為替のレートに注目している。
C 母	ニュースで見ている程度。
D 母	ショッピング関連のことには興味がある。
E 父	日本の経済だけに特に関心があるというわけではなく、ニュース視聴時に日本を含む世界の事情に注目している。
2-9. 日本人・日本語話者の知人の有無	
A 母	いない。
長男	以前隣人が日本語を教えてくれた。
B 母	日本に住んでいる友人がいるほか、昔の学生で中文大学で現在日本語を勉強している人がある。
娘	親戚のお兄さんが日本語を話す。
C 母	いない。
D 母	日本人と結婚して日本に住んでいる親友がいる関係でそのご主人（日本人）とも友人になった。
E 父	以前の上司が日本人。
母	会社の同僚が日本人。
2-10. 勤務先・取引先は日系企業か	
A-D 全員	いいえ。
E 父	外資系だが日本に支社がある。
母	日系企業に勤務している。
2-11. 上記1～10の項目以外に日本について関心・経験のある要素	
A 母・子	電子機器関係。
B 母	経済、特に地震関係のこと。
娘	日本の首相はどうしてころころ変わるのか不思議。
C-D 母	特にない。
E 父	日本の商品はパッキングがきれい、交通が便利。
母	娯楽施設が多い。
2-12. 日本という国への印象及びその理由	
A 母	好き。町がきれいで人も親切、礼儀正しい。
長男	好き。自然環境がきれい。
B 母	好き。景色・食べ物などが好き。
娘	好き。日本人の性格、思いやりの心、礼儀正しいところなど。
C 母	好き。景色がきれいで、人も親切、礼儀正しい。
D 母	好き。日本人は親切で礼儀正しい。初めての旅行で道を尋ねたら言葉が通じないのに一生懸命教えてくれ、連れて行ってくれた。
E 父	一般の人々は平和主義なのに政治家はそうでない。人がとても親切で北海道旅行中に会った日本人は言葉が通じないのに公衆電話まで連れて行ってくれた上にテレホンカードまで使わせてくれた。今でも感謝している。

香港の年少者日本語学習に関する一考察

3. 学習にかかる費用・時間

3-1. 1か月日本語学習に費やせる最大金額	
A 母	あまり考えた事がないが、特に制限はない。
B 母	現状程度なら問題ない（月940ドル）。
C 母	あまり考えた事がない。
D 母	2000～3000ドル程度
E 父母	現在は月に1200ドル（月4回、1回1時間）、いくらまでというのは考えた事がない。リトミックの月謝は800ドル。
3-2. 1週間あたり日本語学習に費やせる最長時間数	
A 母	2時間程度。他にもやるべきことがあるから。
B 母	週に1回程度で学業に影響しない範囲であれば問題ない。
C 母	休み期間中であれば3～4時間、学校があるときは2時間程度。
D 母	2時間以内。学校の宿題との兼ね合いがあるから。
E 父母	現状程度。

4. 自主学習経験

4-1. 子どもの日本語自主学習経験の有無	
A-C-D 母	なし。
B 母	テレビやドラマの視聴を除けばなし。
E 母	親と一緒に遊びを通してという形ならある。
4-2. 教材・学習法	
B 母	テレビやドラマの視聴。
E 母	ひらがな文字カードの利用や Youtube の視聴。

5. 保護者の学習経験

5-1. 保護者の日本語学習経験の有無	
A-C 全員	なし。
D 母	ある。中学生時代に後に日本人と結婚した親友に誘われて1年間ほど一緒に学んだ。
E 父	上司が日本人だったため。また日本の文化に興味を持っていたから。
母	会社で隣の席にいた同僚が日本人で、よく話しかけてきたが会話が続かないため何とかならないかと思って。
5-2. 日本語の到達レベルと学習法	
D 母	学校でテキストを利用して。
E 父	自主学習。
母	日本語講座のコースで2年程度学んだ。現在は子どもと一緒に子どもの教材を見ながら復習している。

6. 日本語能力試験（JLPT）

6-1. 子どもの JLPT 受験を希望するか	
A-C-D-E	希望する。
B 母	将来的には希望する。
娘	N1 レベルなら希望する。
6-2. JLPT の目標レベル	
A-D 全員	N1。
E 父母	特になし。
6-3. 受験を希望する理由	
A 母	自分のレベルがわかるから。資格は持っているにこしたことがない。
長男	国際的に認められているテストだし、自分の到達レベルが分かるから。
次男	テストがないと自分のレベルが分からないから。
B 母	中4という大切な時期なのでまずは学業を中心に。
娘	N1 以外の下のレベルは受けてもあまり意味がないと思う。
C 母	学習の到達レベルが測れる。国際的に認められている資格だから。

D	母	学習レベルが分かるし将来プラスになると思う。テストなどがないと子どもは真剣に勉強しないので、モチベーションになる。
E	父	子どもはあまりテストが好きではないようだが、目標があれば学習が進むし自分の現在のレベルがわかるから。

7. NSS カリキュラム

7-1. HKDSE 試験の選択科目に日本語が入ったことを知っているか	
A	C-D 知っている。
B	母 知らなかった。 娘 知っているが学校は日本語の受験をあまり勧めない。
E	父母 知らなかった。
7-2. 子どものNSS日本語科目選択についての希望	
A	母 子どもの希望による。 長男 NSSでなく国際バカロレア課程を選択した。 次男 まだよくわからない。
B	母 日本語に興味があって続けたいなら希望する。子どものやりたいことをやらせてあげたい。 娘 日本語を選択して学習を続けたい。
C	母 希望する。
D	母 子どもの学習状況を見て決めたい。
E	父母 希望する。勉強する場があるならやらせたい。
7-3. 子どものHKDSE日本語試験受験についての希望	
A	母 長男はHKDSEを受験しないが受けたらHKDSEの受験対策として現状と同様の時間と費用は負担可能(月6時間で720ドル)。 長男 国際バカロレア選択なので制度が違う。受けたとしても週3~4時間程度の勉強が限度。英語・中国語など他科目のほうが大切。
B	母 学校が情報をきちんと与えてくれるなら受験を希望する。 娘 できれば受験したいが学校側が選択科目を3つまでしか受験させてくれない。4科目受験できるなら日本語を選択したい。
C	母 希望する。選択肢が広がり、公的に認められた資格が取れる。
D	母 子どもの学習の状況をみて決めたい。
E	父母 希望する。日本語ができるなら受験するのが当然。

8. 震災・円高の影響

8-1. 震災の子どもの日本語学習への影響	
	全員 ない。
B	母 かえって日本事情に深く注目するようになったと思う。
8-2. 円高の子どもの日本語学習への影響	
A	母 ない。でもしばらく日本への旅行を控える。
B	母 学校が提供するコース内容に沿って勉強しているだけなので特に影響はないと思う。 娘 特にない。
C	母 学習への影響はないが、日本への旅行や日本製品の買い物は控えている。
D	母 円高で日本旅行に行きにくくなっただけ。
E	父母 特にない。

9. 家庭の状況

9-1. 家庭内での使用言語	
A	母・子 広東語
B	母・娘 広東語・英語(インドネシア人メイド)
C	母 広東語・英語(フィリピン人メイド)
D	母 広東語・英語(フィリピン人メイド)
E	父母 広東語・英語(時々)・日本語(時々)

香港の年少者日本語学習に関する一考察

9-2. 日本語以外に学んでいる言語	
A	長男 学校の課外活動でスペイン語を週1時間45分学んでいる。講師はスペイン人。 次男 学校の授業で北京語を学んでいる。
B	母 特にない。 娘 学校の授業で北京語を学んでいる。
C	母 北京語。
D	母 北京語。
E	父母 今はまだない。
9-3. インタビューを受けていない保護者の意識	
A	母 何か語学を勉強することに対して父親も賛成している。
B	母 大いに賛成している。普段あまり子どもに会えない分、子どものやりたいことをやらせてあげたいと思っている。
C	母 外国語を学ぶことには賛成している。どの言語を学ぶかは、母と息子が相談して決めた。
D	母 賛成している。
E	父母 両親共にインタビューを受けたが、共に日本語学習に賛成している。

10. 目標

10-1. 日本語能力の到達度についての希望	
A	母 雑誌やテレビが分かるレベル。生活が豊富になるから。 長男 英語やボディランゲージを使わずに日本人とコミュニケーションが取れるレベル。 次男 ペラペラになりたい。
B	母 子ども自身に興味があるなら大学で日本研究をするようなレベル。 娘 日本人と自然な会話ができるようなレベル。
C	母 日本人と日本語でコミュニケーションが取れるレベル。
D	母 子どもの希望次第。
E	母 特にない。まずは楽しく勉強できればいい。
10-2. 将来日本語を使用する場面についての希望	
A	母・子 旅行。
B	母 子供が興味を持てる場面であれば何でも。 娘 好きな歌手と日本語で話せる。
C	母 旅行。子どもが希望するなら日本語を使う仕事（日本語教師、日本語通訳）などの道を考えてもいい。
D	母 旅行で通訳が出来るようになってほしい。
E	父母 特に考えたことはない。今は別に何か目的があって学ばせているわけではないから。何かを学ぶのはごく普通のことだから。